

第208回 日文研フォーラム



中国出土の文物からみた 中日古代文化交流史

和同開珎と井真成墓誌を中心として

Light Shed on Sino-Japanese Cultural Exchange
by Archaeological Artifacts Found in China

The *Wadō Kaihō* Coin and the Grave Stone of Sei Shinsei
(an Envoy to the Tang Court)



王 維 坤
WANG Weikun

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 猪木武徳

● テーマ ●

中国出土の文物からみた 中日古代文化交流史

和同開珎と井真成墓誌を中心として

Light Shed on Sino-Japanese Cultural Exchange
by Archaeological Artifacts Found in China
The *Wadō Kaihō* Coin and the Grave Stone of Sei Shinsei
(an Envoy to the Tang Court)

● 発表者 ●

王 維 坤
WANG Weikun

西北大学国際文化交流学院 教授・副院長
Professor, Deputy President, School of International Cultural Exchanges,
Northwest University
国際日本文化研究センター 外国人研究員
Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies



2007年12月12日 (水)

発表者紹介

王 維 坤

WANG Weikun

国際日本文化研究センター 外国人研究員

Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies

略 歴

- 1994年10月 文学博士（同志社大学）
1995年12月 西北大学文博学院教授
1998年 4 月 同志社大学客員教授（2年間）
2003年 9 月 京都大学人文科学研究所客員教授（半年間）
2004年 3 月 西北大学国際文化交流学院副院長

著書・論文等

1. 『中日の古代都城と文物交流の研究』朋友書店 1997年
2. 『中日文化交流的考古学研究』陝西人民出版社 2002年
3. 専修大学・西北大学共同プロジェクト編『遣唐使の見た中国と日本—新発見「井真成墓誌」から何がわかるか』朝日新聞社 2005年
4. 戴彤心・王維坤・張洲共著「宝鶏石咀頭東区発掘報告」『考古学報』1987年第2期
5. 「唐章懷太子墓壁画“客使図” 辨析」『考古』1996年第1期
6. 「絲綢之路沿線発現的死者口中含幣習俗研究」『考古学報』2003年第2期
7. 「唐代乾陵寢制度的初歩探討」京都大学人文科学研究所『東方学報』第76册 明文舎2005年
8. 「保護できぬ発掘無意味」『読売新聞』2007年6月15日第13版
9. 「高松塚古墳の思い出」旅の文化研究所『まほら』54号「特集 再訪・再会」2008年1月
10. 「高松塚古墳の『切石』に新説／中国・西北大の王教授が『供物台』」『読売新聞』夕刊文化欄 2008年1月31日第3版

他多数

はじめに

ご紹介いただきました王維坤と申します。中国唐代の都・長安（現在の陝西省西安市）にある西北大学から参りました。まず私がお話したいのは、西北大学のキャンパスについてです。現在キャンパスは三カ所あります。その内、二カ所は唐の都・長安城の市内にあります。一つは、「太平坊」にあり、もう一つは「崇化坊」にあります。発掘すれば、必ず色々な文物が出土します。例えば、一九五四年、本部の運動場を施工していたところ、驚くことに四〇〇〇kgの「開元通寶」が出土しました。正直に言えば、西北大学の考古学専攻の人氣が高まっている基本的な原因は、この大学キャンパスで良い文物が出土することだと思えます。

この度、私は国際日本文化研究センターの外国人研究員かつ研究代表として一年間招聘され、受入れ教授宇野隆夫先生をはじめとする日本国内三五名以上の教授・研究者と共同研究できることを何より嬉しく思います。それと同時に、私の肩に大きな責任がかかっていることを痛感しています。

本日は、日文研のお陰をもちまして第二〇八回のフォーラムで発表させていただき光栄です。なお、皆様とお会いできて本当に嬉しく思います。時間のゆるす限り、以下の

二つの問題点、すなわち、「和同開珎」わどうかいほうと「井真成墓誌」せいしんせいを中心として発表させて頂きたいと思います。

一、「和同開珎」の謎

最近、私は「日本の『和同開珎』の謎がついに解明した」というタイトルで、論文を書きました。私の研究は一言で言えば、「和同開珎」の鑄造にかかる複雑な歴史的背景と古代日本人の国民性との密接な関係についてです。古代の日本人は、現代の日本人と同じように、非常に賢明でした。特に外来文化を受け入れる時、そのまま受け入れるのではなく、ある程度選択して自国の国民文化に適するものだけを模倣したのが、その特徴です。換言すれば、もし中国の古代文字をそのまま模倣すれば、中国の文字と区別できません。しかし、少しでも変えると日本の国字になるでしょう。ですから、日本の漢字は、ざっと見ると、中国の漢字と同じですが、実際はすこし違うところがあります。例えば、中国の器物の「器」と日本の器物の「器」、中国の調査の「查」と日本の調査の「查」、中国の「恵」と日本の「恵」、中国の「徳」と日本の「徳」、中国の「氷」と日本の「氷」、中国の「臭」と日本の「臭」を比べると、いずれも違う所があります。

中国の文字の中では、「」があるかどうかで意味が異なります。例えば、中国の「臭」と日本の「臭」を比べれば、一つの点「、」という差があります。「臭」という字は、上の「自」は、鼻の象形字で、下の「犬」は犬の象形字です。この字は犬の嗅覚きゆうかくのすぐれたことを表わします。もう一つの含意は鼻が一点（少しの意）でも大きすぎると、臭くなる、つまり、中国では鼻が少しでも高すぎると、臭くなるという意味を表わします。この字は「、」がなければ、文字にならないと言えます。ですから、中国では、日本のような「臭」字はありません。この点から見ると、日本のいわゆる「和同開珎」の「珎」の字は、中国の「珍」字の異体字ではなく、「寶」の真ん中の部分である「珎」だけをとって、自ら造った国字だったと思います。

「和同開珎」という通貨は、実際、唐高祖李淵の武徳四年（六二二）に初めて発行した「開元通寶」を模倣原型として鑄造した通貨だったと、私は思います。

「開元通寶」という銅銭名の文字は、唐代の有名な書道家・歐陽詢（五五七～六四二）が書いた文字であったと言われています。唐代では「寶」の字の書き方が色々あり、例えば、この字以外に、「寶」のような書き方もあります。しかし、銅銭名の文字としてこのような「寶」の字を一切使わなかったのは、事実だと思えます。

唐代の「開元通寶」という通貨は、現在、省略して「開元錢」あるいは「通寶錢」と

俗称しますが、考古学者にとつていま一番困ることは、とりあえず「寶」を省略した「宝」の字を、よく使用することです。元々の「寶」の字の意味がなくなるばかりでなく、特に日本の「和同開珎」と何か関係があるのかどうかも全く分からなくなつたのです。

それでは、唐代の通貨は、なぜ「開元通寶」と読むのか言うと、「開元」とは、初めて銅銭を發行したという「新紀元」、「開国の奠基たもと」の意をもち、「通寶」とは、社会に流通する「通貨」の意を表わします。換言すれば、唐代の「開元通寶」は、「銭」を以つて「寶」と為す「貨幣」のシンボルと言へるでしょう。

また、「開元通寶」の材質から見ると、銅幣以外に、金幣・銀幣・玳瑁幣たいもん・紙幣・泥幣があります。しかし、金幣と銀幣の「開元通寶」は、流通する貨幣ではなく、主に皇家の賞賜しょうしあるいは達官顯貴の観賞用となるものです。ゆえに銅幣が重要な流通貨幣です。法門寺出土の一三枚の玳瑁幣は、貨幣よりもむしろ祭祀品だと思ひます。いわゆる紙幣・泥幣は墓の「冥錢」です。日本の学界における、今までの「和同開珎」に関する研究には、私の知る限り、少なくとも六つの誤りが存在しています。

1 「和同」の意味

「和同」について、日本の研究者の研究によれば、「和わ」という国がはじめて「同」（銅）

で銅錢を鑄造したとする解釈が昔から存在している。このような解釈はすいぶん間違っている、私は思います。なぜかというところ、「和同」の「同」は、すなわち「銅」の異体字です。「和同」とは、「和銅」という年号を表わしたものです。「和銅元年」とは、西暦七〇八年ということ事です。

2 「和同開珎」の読み方

私の研究によれば、「開珎」は、上述の通り、唐代の「開元通寶」の省略だったと思えます。「珎」という字は、実際、中国の漢字である「寶」の真ん中の部分だけをとって、日本古代人が自ら造った国字になったはずでです。ですから、この「珎」の字の読み方は「珎」ではなく、「珎」の方が正しいと思います。「珎」とは、めずらしいという意味です。「珎」こそが、寶の本意です。

3 「和同開珎」の原像

「和同開珎」は、実際には「和銅開寶」と書くべきですが、日本古代人が唐の「開元通寶」をある程度変えるために、「和同開珎」という形にしたと、私は思います。皆様はどのように思われますか。

4 「和同開珎」の省略と「貝」

「和同開珎」の「珎」は、「貝」を省略するのが、少し省略しすぎとか変えすぎだと思えます。ご承知の通り、「通寶」とは、流通する「通貨」の意を表わします。古代の「通貨」は、いまの言葉で言いますと、「貨幣」です。ここで注意すべきことは、「通貨」と「貨幣」は、いずれも「貝」という部分をもつ点です。「通貨」の歴史をさかのぼりますと、やはり「貝」から始まったのです。だからこそ、「和同開珎」の「珎」は、「開元通寶」の「寶」の字をある程度変えて造った国字の「珎」だと、私は思います。

いま問題にしたいのは、「和同開珎」の「珎」の字が、私の見たところでは、本当に省略しすぎ、変えすぎたという点です。「貝」をもたない「珎」は、納得できないというよりもむしろ貨幣にならないと言えます。

5 「和同開珎」の模倣原型

七〇八年に発行された「和同開珎」の読み方は、時計回りに読むのですが、唐の「開元通寶」の上から下・右・左へと読む読み方に比べると、随分と違ってきます。私の最新の研究によりますと、「和銅」元年（七〇八）に「和同開珎」を鑄造した時、おそらく乾封元年（六六六）夏四月、高宗李治が泰山に登る「封禪」を記念として「乾封」年

号をもって鑄造した「乾封泉寶」（この貨幣は、わずかに八カ月だけ流通したという）を参考にしながら、主に「開元通寶」を省略した「開寶」の「寶」の字の真ん中の部分だけを模倣して鑄造した「和同開珎」ではないかと思えます。もちろん唐肅宗李亨乾元元年（七五八）に鑄造された「乾元重寶」は、「開元通寶」の読み方に戻ったので、日本の「和同開珎」は、「開元通寶」と「乾元重寶」を模倣した以外の可能性はないと言えます。

6 「和同開珎」の「開」

「和同開珎」の「開」の字は、研究すべき問題です。この「開」の字は、「開元通寶」の「開」の字と比べれば、違いはないと思えます。これは、模倣の証拠の一つとする私の最新研究です。

二、「井真成墓誌」の発見と最新研究

井真成せいしんせいは、唐時代の日本からの留学生です。六九九年に生まれ、七三四年に僅かに三十六歳で亡くなったという人物です。その墓誌は、四年前の二〇〇四年四月頃、陝西省の



図2 和銅元年（七〇八）に鑄造した金「和同開珎」

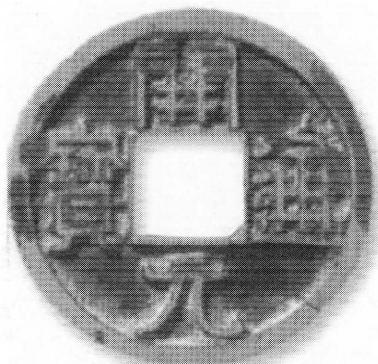


図1 唐武德四年（六二一）に鑄造した金「開元通寶」

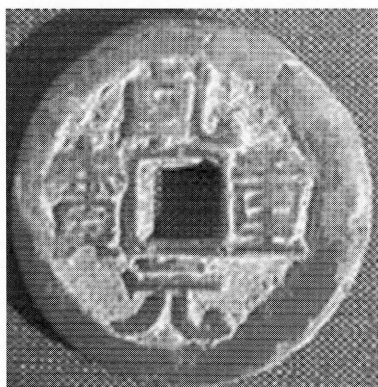


図4 唐乾元元年（七五八）に鑄造した「乾元重寶」銅錢



図3 唐乾封元年（六六六）に鑄造した「乾封泉寶」銅錢

ある建築会社が西安市の東郊外においてシヨベルカーで不法工事をしていた時、偶然に見つかった墓誌です。この墓誌を発見してから今に至るまで、既に四年が経過したのですが、その研究の必要性はますます高まっていると云えます。

二〇〇五年の一月二八日と二九日、専修大学・西北大学共同プロジェクトによる東京朝日ホールでのシンポジウムには、二五〇〇人が応募しました。このような大きな会場はありませんので、仕方なく抽選にいたしました。二〇〇七年の十月二七日と二八日には、第二回遣唐使シンポジウムを行ないました。私も講演をいたしました。未解決の問題はまだまだあると思います。

1 井真成墓誌発見の経緯

先に述べたように、四年前の二〇〇四年四月頃、陝西省のある建築会社が西安市の東郊外で不法工事をしていた時、偶然に長安で死去した日本留学生の井真成という人物の墓誌蓋と墓誌銘を掘り出し、すぐ民間の文物市場に秘密裏に売り出しました。その際、西北大学歴史博物館の副館長賈表明氏は、この情報を聞いて、早速この文物市場へ見に行きました。

特に墓誌銘に陰刻されている「公姓井、字真成。國号日本」に注目すると同時に、私

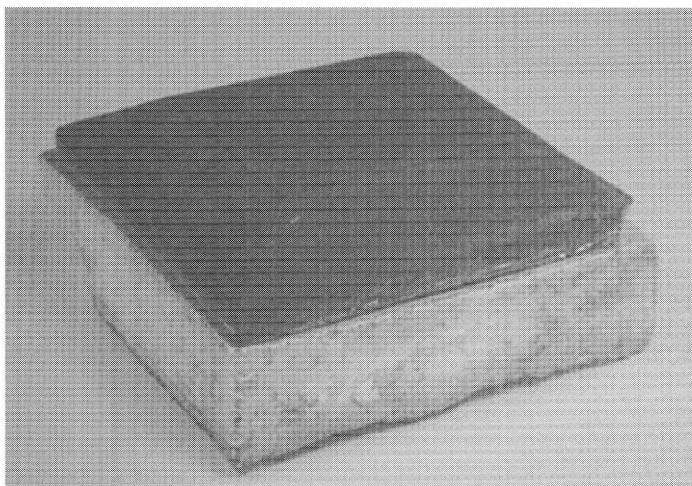


図5 井真成墓誌 王維坤提供 上 墓誌蓋 下 墓誌銘



図6 西北大学歴史博物館副館長賈明氏 北京『新京報』より

誌府奉贈
之君御尚
銘墓井衣

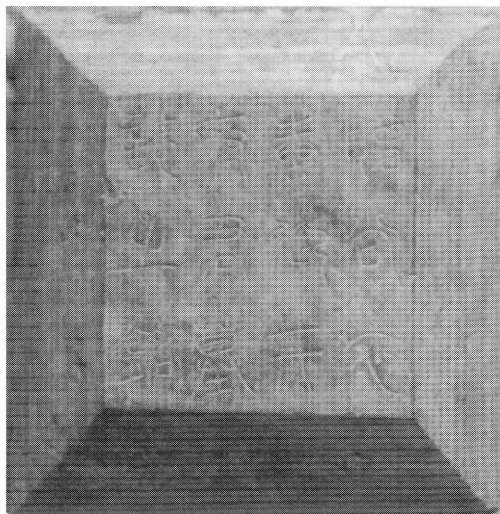


図7 井真成墓誌蓋の写真 王維坤提供

國号日本

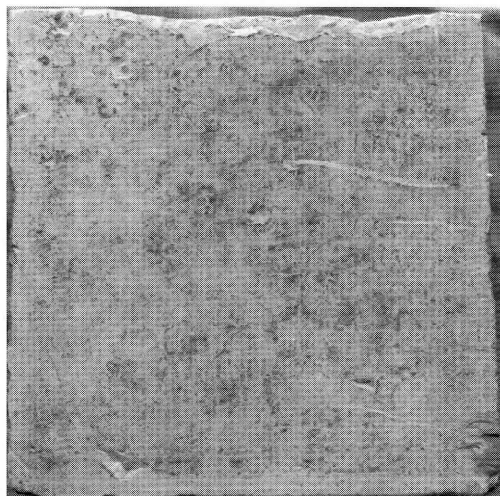


図8 井真成墓誌銘の写真 王維坤提供

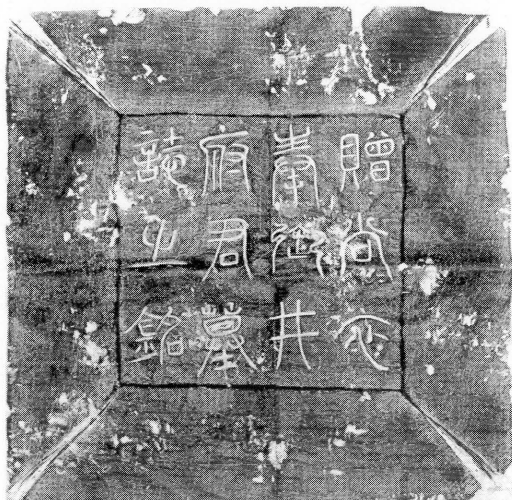


図9 井真成墓誌蓋の拓本写真 王維坤提供

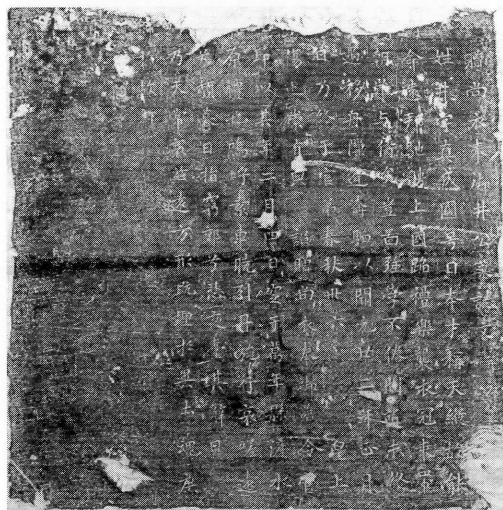


図10 井真成墓誌銘の拓本写真 王維坤提供



図11 2004-10-10 日中友好協会会長平山郁夫先生は井真成墓誌の初公開式に出席
王維坤提供



図12 2004-2-4に筆者は圀勝寺檀家総代渡邊捷平先生（右）・元同志社大学施設部長松浦靖先生（左）のご案内で圀勝寺を見学、骨蔵器が出土した下道氏墓域の入口にて
王維坤提供



図13 圀勝寺「国宝」に指定されている吉備真備の祖母骨
蔵器の実物写真 王維坤提供



図14 圀勝寺「国宝」に指定されている吉備真備の祖母骨
蔵器蓋の銘文 王維坤提供

の所へ電話で連絡してくれましたので、すぐ「井真成という日本人留学生を含む遣唐使墓誌の発見は初めてであるばかりでなく、日本という国号も墓誌に初めて出てきたものです。ですから絶対に研究価値と文物価値があります。よければ、急いで買いたしましょう」とすすめました。賈氏も勿論、この墓誌自体の価値をよく知っていたので、交渉した結果、この墓誌を信じられないほどの安価で購入できたのです。

井真成墓誌は、以上に述べたように、シヨベルカーによる不法工事で掘り出したものです。その墓はすっかり破壊されてしまいました。これは非常に残念なことです。幸いに墓誌という国宝級の文物が残留したのです。

この墓誌は、いま単に西北大学歴史博物館に収蔵・陳列されている文物の一つであるだけでなく、大学の「館を鎮める宝」という文物になったと言えます。このようなレベルの墓誌がもし日本で出土すれば、間違いなく「国宝」になるでしょう。中国には、「水を飲む時は源を考える」という諺があります。だからこそ、私たちが井真成墓誌を研究する時には、賈氏の功勞を忘れてはいけなないと、私は堅く信じています。

この墓誌は、いうまでもなく中国における在唐の日本人の墓誌の初発見ですので、たちまち中日の学界から注目を集めました。具体的に言えば、二〇〇四年十月十日の午後、西北大学は、陝西歴史博物館で『首次發現唐代日本留学生墓誌新聞发布会』を開催し、

日中友好協会会長平山郁夫氏は井真成墓誌の初公開式に出席されました。その後、西北大学文博学院もまた数十人の中日の著名な専門家を招待して、同年の十二月十八日、十九日に学院の会議室で『中古時期中外文化交流學術研討会』を開きました。この討論会では、諸先生からの積極的な発言を受け、いろいろな立場から井真成墓誌をめぐる諸問題を検討しました。

2 井真成と「贈尚衣奉御」の性格

「尚衣奉御」という官職は、隋唐時期の「尚衣局」の下の一種の職事官でありました。同時に「六尚」という職事官の一つでもありました。「六尚」とは、即ち「尚食奉御」「尚薬奉御」「尚衣奉御」「尚舍奉御」「尚車奉御」「尚輦奉御」を言い、その三番目の位置にあつて、かなり権力があつた官職と言えます。李隆基撰、李林甫注の『大唐六典』巻一の記載によると、「尚衣局、奉御二人、従五品上なり。……隋の門下省に御府局監二人有り。大業三年（六〇七）、分かたれて殿内省に属す。其の後又改めて尚衣局と為し、皇朝は之に因る。龍朔二年（六六二）、改めて奉冕大夫と為し、咸亨元年（六七〇）、旧に復す。……尚衣奉御は、天子の衣服を供するを掌る。其の制度を詳らかにし、其の名数を辨じ、而して其の進御に供す」とあります。このことから、「尚衣奉御」の主な責

務は、「天子の衣服を供するを掌る」ことであるということがよくわかりました。しかし、「贈尚衣奉御」から見ると、井真成が生前にこの役人になったのではなく、死後に贈られた一種の榮譽官職であったことは明らかです。

注目に値することは、唐玄宗の李隆基の摂政期間（七一二〜七五六）に、「尚衣奉御」の任用制度が、以前と比べて大きな変化をしたことです。例えば、唐玄宗の三〇人の息子の中で、「尚衣奉御」になった皇子は一人もいなかったのです。その時、皇后の妹夫である長孫昕が、なんとこの「尚衣奉御」という席に座っていたので、皇子を含む皇室貴族が昇進して「尚衣奉御」の官職に就くことがいつの間にか厳しくなっていたのです。このことから見れば、出身低微の下級官吏が、唐玄宗の摂政期間に従五品上の「尚衣奉御」に昇進することはたいへん難しいのに、まして井真成は日本から来た一人の留学生でありました。もし井真成が確かに七一七年に第九次の遣唐使団に随って入唐していたのであれば、七三四年の不慮の死亡まで、彼は長安に一九年以上滞在したことになりません。ここで想像すると、井真成が青年期に死去したのでなければ、彼は結局何年まで長安に滞在したのか？ 最終的には唐朝のどの位の官吏にまで昇進したのか？ ひいては本人は中日の文化交流に対してどのくらい貢献したのか？ これは誰にも推測できないことでありましょう。ところで、私の考えでは、少なくとも「我が朝の学生にして名を唐

国に播す者は、唯だ大臣（吉備真備）と朝衡（阿倍仲麻呂）との二人のみ」（新日本古典文学大系4『続日本紀四』岩波書店、一九九五年）という二人だけではなく、たぶん井真成を考慮する可能性があったであろうと思います。

以上に述べた通り、井真成が長安に滞在した期間は、唐玄宗の李隆基の摂政期間であったばかりでなく、「尚衣奉御」の官職に昇進することが最も困難な特殊時期でもありました。これにより、井真成が生前に一度も「尚衣奉御」という官職に上れなかったことは、決して彼の能力の問題ではなく、当時の職位に空位のなかったことが原因であったと、私は考えています。ここで井真成の人柄をあえて推測するならば、無名の日本人留学生の井真成は、その死に対して唐玄宗の摂政・李隆基に悲痛の感を与えると同時に、「追崇するに典有り」という唐代の喪葬儀礼を行なわせたのであります。このような情況は唐玄宗の李隆基が井真成の生前の人柄と能力を高く評価していたばかりか、二人の私下交往（上下の人間関係）もかなり親密であったことを反映していると思われれます。更に言えば、二人の間のこのような密接な関係の形成は、井真成の一九年間の長安滞在と「強学不倦」という一生懸命に勉強する精神及び才能のはなやかさと関係があったと思います。そうでないと、井真成墓誌に陰刻されている「皇上は哀傷し、追崇するに典有り、詔して、尚衣奉御を贈る」という墓誌銘文が説明できないと考えています。

3 井真成という中国風の姓名

中日の学界では、この井真成の改名について、いろいろな見方を提言したのであります。帰納すれば、おおよそ、「井上説」「葛(藤)井説」「唐名説」という三つの学説になります。

第一の学説は、国学院大学教授鈴木靖民先生が提出した「井上説」です。即ち、「井」という中国姓は、現在の大阪府藤井寺市一帯を本拠とした渡来系の『井上忌寸』^{いみき}という一族ではないか。一族の中でも特に優秀で、コネもあつたのだらう」と、鈴木靖民氏は推測されました。

第二の学説は、奈良大学教授東野治之先生が提出した「葛(藤)井説」です。つまり、「ただ『井』という姓は、日本姓を省略して名乗っているはずだから、この字のつく氏族の出身者だつたことは分かる。そこで、想起されるのは、七世紀末から八世紀前半にかけて、遣唐使少録、遣新羅使、遣唐留学生などを輩出した葛井氏の存在である。この一族は渡来系で南河内の葛井寺付近を根拠地とし、もと白猪氏といった。一族の中に古くから葛井を名乗るものがあつたらしく、和銅ごろの人として葛井諸会が、白猪広成とならんで『経国集』に見える。一族には広成、葛井大成、同清成など、類似の名をもつ同世代人がいるが、あるいは真成の近親者であらうか。もちろん「井」が上につく氏で

もよいが、葛井氏のように、この方面で活躍する人は出ていない」と、東野治之氏は研究されました。

第三の学説は、実は、私自身が提出していた「唐名説」です。換言すれば、井真成という遣唐の日本人留学生は、入唐してから、中国風の「唐名」に改名したと、私は推測しています。私の見たところでは、井真成の出身は、結局「井上氏」の出身であろうが、それとも「葛（藤）井氏」の出身であろうが、私は、上述の二つの推測の可能性をまったく否定はしないが、しかし、井真成の改姓は、たぶん「井上」とも「葛（藤）井」とも直接には関連がなさそうです。即ち、鈴木靖民先生の見方は、「井上」姓の下の「上」をとるべきであり、東野治之氏の見方は、これに反して「葛（藤）井」姓の上の「葛」（藤）をとるべきであります。この点から分析すれば、両者の改名には明らかに一定の規律がありません。思うに、井真成の名字は、元々の名前とは関係がなく、自ら「唐名」に改名したのであるかと、私は推測しました。実際、早く隋の煬帝の大業三年（六〇七）には、隋の人々が遣隋使の名字について音訳を行なっていたようです。例えば、当時、隋の人々は（小野）妹子を「蘇因高」と呼び、（難波）雄成を「乎那利」と呼んでいたのです。汪向荣先生と夏応元先生の研究によると、遣隋使の大使の「蘇因高」という名前は、妹子の日本語の音訳であり、「乎那利」という名前は、雄成の日本語の音訳です。

唐代に至っても、遣唐使・留学生・学問僧たちは、みずから自分の名前をつけるのに熱心だったように思われています。例えば、阿倍仲麻呂（仲満）の中国名「朝（晁）衡」は、彼自身が自分のためにつけたものです。『旧唐書』卷一一九上「東夷列伝」の記載によると、「其の偏（副）使朝臣なる仲満は、中国の風を慕って、因って留まり去らず、姓名を改めて朝衡と為す」とあるのは、そのことです。こうしたことから、井真成の名前は、古代の日本風の名字でないとするならば、阿倍仲麻呂の状況と同じく、彼自身が自分のために改名した中国風の名字——井真成だったと推測できるのであります。これは、まさに私の第三の「唐名説」の学説の証拠であります。

なお、一般的に言えば、改名はしやすいのですが、改姓はかなり難しいのです。ここで、もう一つの実例を挙げたいと思います。

私は、二〇〇六年九月一五日に「唐日本留学生井真成改名新証」という論文を書いて『中国文物報』に掲載しました。私の見た資料の限りでは、唐時代の日本人の「井」に関する姓は、いままでに二つの例を捜すことができました。井真成以外に、もう一人「井俣替」という人物が存在したのです。この人は下痢のため唐時代の揚州で死亡した第一九次遣唐使船の船師佐伯金成の僱従でありました。このことは、円仁の『入唐求法巡礼行記』の唐開成三年（日本承和五年、西暦八三八年）八月十八日条に明らかな記載

を残していると言えます。

ここで注目すべきは、井真成や井俣替など、彼らの改名は、何れも遣唐使と関係があったらしいことです。私の推測が間違ひなければ、二人の改名は、たぶん阿倍仲麻呂の状況と同じように、入唐してから中国の唐名風を慕つて、自ら改名したのであって、元々日本風の名前とは関係がなさそうに思います。これが、私の唐の日本人留学生井真成の改名に関する新証でもあると言えます。

実は、今に至るまで、この三つの学説以外に、また別の学説も存在しています。例えば、「情真誠説」「九州王朝説」「和姓説」もあります。

第四の学説は、中日関係史学会副会長張雲方先生が提出していた「情真誠説」です。つまり、彼の見たところでは、「井真成」は、この日本人留学生の中国名であり、「井」姓はたぶん唐の皇帝から賜った姓だと思ふ」とあります。

なお、「阿倍仲麻呂の『朝衡』は、元の名前と関係がない。『朝衡』には、実際は永遠に唐の朝廷を拝し、朝貢するという意味が含まれていると思われる。『井真成』もひよっとすると『情真誠』（「情」と「井」は中国語の発音が似ている）という意味が隠されているのかも知れない。現在までのところ、現存する史料の中には、『井真成』という名前は見つかっていない。しかし、死亡した年から逆算すると、生まれた年は六九九年

であることは間違いない」と推測しました。実は「井真成」の「井」の中国語の発音は「jing」であり、「情真誠」の「情」の中国語の発音は「qing」です。両者の発音が似ているとは言えないと思います。その上、中国の『百家姓』の中に「情」姓はなさそうです。

第五の学説は、古田史学の会事務局長の古賀達也先生が提出していた「九州王朝説」です。即ち、「第一話は最近（二〇〇五年）何かと話題になっている『井真成』いのまなり」についてです。中国で発見された墓誌により『井』さんが遣唐使として中国に渡り、当地で没したことが明らかになったのですが、藤井さんとか○井さんとかが日本名の候補として上げられているようです。他方、『井』という姓が日本に存在することから、文字通り『井』せいさんではないかという異見も出されています。古田先生もこの『井』という姓に注目されています。電話帳で調べた結果では、熊本県に圧倒的に濃密分布しています。中でも産山村・南小国町・一ノ宮町が濃密です。この分布事実は九州王朝説の立場からも大変注目されるどころです」と述べられています。

第六の学説は、日本の学界の諸先生が提出していた「和姓説」です。つまり、日本の学会では、「井」という姓をめぐって、和姓の一部を中国姓としたとする説が有力になり、元の和姓について、「葛井」、「井上」、「白猪」などの説が出されました。また、「井真成」

の出身地は、現在の藤井寺市であると確定的に報道されています。さらに、墓誌里帰り運動が盛り上がり、墓誌は愛知万博で公開された後、東京↓奈良↓九州の各国立博物館での展示後、「郷里」藤井寺市へ届けられる手はずになっているようです。この墓誌発見以降の一連の「事態」に、室伏志畔氏（「越境の会」代表）のセンサーは敏感に反応しました。おそらく、「井真成」問題の「向こう側」を直感的に幻視したのでしょう。

氏は、学会やマスコミを中心とした「こちら側」の安易な歴史認識に憤りを覚え、一カ月のうちに「腕と人間を見込んだ」八人を糾合し、図書『和姓に井真成を奪回せよ』を出版したのです。これはまさに、歴史認識において停滞し退廃した「状況」に対する抵抗戦であり、知的集団戦でもあります。室伏氏を中心とした「越境の会」の主張は、極めて明快です。すなわち、「井真成」の姓「井」は、中国姓に倣って一字姓に変えた「井（＝セイ）」ではなく、和姓の一字姓「井（＝イイ）」であり、「井真成」は（イイマサナリ）という名前であったとするものです。それでは、「井（＝イイ）」姓の日本における分布はどうなっているのか。本書第四章の白名一雄氏の調査によると、非常に興味深い結果が示されています。全国の「井（＝イイ）」姓の約半数は熊本県に集中している。さらに、熊本県の中でも阿蘇郡、特に「産山村」が最も多い。この観点からすると、「井真成」の故郷は藤井寺市ではなく、熊本県阿蘇郡産山村と考える方が理にかなうことに

なる。この、シンプルで力強い論理的推論が、「井真成」問題における「越境の会」の論の根幹です。日本の学会やマスコミは、なぜこのような可能性さえ思い描かないのか。本書を読み進むうちに、そのような思いが強くなってくる、と強調しました。

4 「日本」国号について

ここで注目すべきことは、井真成墓誌に初めて「國号日本」ということが出現しました。「日本」という国号は、今までに知られている中日の古代文献の記載から見ますと、中国で出現した年代は日本での年代よりやや古いのです。北宋の歐陽修（一〇〇七〜七二）・宋祁が書いた『新唐書』卷二二〇「東夷列伝」の記載によりますと、「日本は、古の倭奴なり。……永徽初、其の王の孝徳即位し、改元して白雉と曰い、虎魄（即ち琥珀）の大なること斗の如きもの、瑪瑙の五升の器の若きものを献ず。時に新羅は高麗、百済の暴す所と為り、高宗、璽書を賜いて、出兵して新羅を援けしむ。……咸亨元年（六七〇）、使を遣りて高麗を平らぐを賀せしむ。後に稍や夏音に習み、倭の名を悪んで、更めて日本と号す。使者自ら言わく、国、日の出ずる所に近ければ、以て名と為すと。或いは云う、日本は乃ち小国なれば、倭の併する所と為り、故に其の号を冒すと。使者は情を以てせず、故に焉を疑う。又た妄りに其の国都の方数千里を誇るも、南と西は海に

尽き、東と北は大山に限られ、其の外は即ち毛人なりと云う。長安元年（七〇二）、其の王の文武立ち、改元して大宝と曰い、朝臣真人粟田を遣りて方物を貢がしむ」（日本、古倭奴也。……永徽初、其王孝德即位、改元曰白雉、献虎魄（即琥珀）大如斗、瑪瑙若五升器。時新羅為高麗、百濟所暴、高宗賜璽書、令出兵援新羅。……咸亨元年（六七〇）、遣使賀平高麗。後稍習夏音、惡倭名、更号日本。使者自言、国近日所出、以為名。或云日本乃小国、為倭所并、故冒其号。使者不以情、故疑焉。又妄誇其国都方数千里、南、西尽海、東、北限大山、其外即毛人云。長安元年、其王文武立、改元曰大宝、遣朝臣真人粟田貢方物）とあります。上述の記載に間違いがなければ、「倭」という国号を、正式に「日本」という国号に変えるのは、咸亨元年としたほうが良いと思います。

なお、后晋（九三六〜九四六）の劉昫等が書いた『旧唐書』卷一九九上「東夷列伝」の記載によりますと、「日本国は、倭国之別種なり。其の国の日邊に在るを以て、故に日本を以て名と為す。或いは曰わく、倭国は自ら其の名の雅ならざるを惡み、改めて日本と為すと。或いは曰わく、日本は旧と小国にして、倭の国の地を併すと。其の人の朝に入る者、多く自ら矜大にして、実を以て対せず、故に中国は焉を疑う。又た曰わく、其の国界の東西南北各数千里、西界、南界咸な大海に至り、東界、北界大山有りて限りと為し、山外は即ち毛人の国なりと」（日本国者、倭国之別種也。以其国在日邊、故以

日本為名。或曰：倭国自惡其名不雅、改為日本。或云：日本旧小国、并倭国之地。其人入朝者、多自矜大、不以実対、故中国疑焉。又云、其国界東西南北各数千里、西界、南界咸至大海、東界、北界有大山為限、山外即毛人之国」とあります。実際には、『旧唐書』の成書年代は前にあり、『新唐書』の成書年代は後にあります。これによって、『新唐書』と『旧唐書』の中に「日本」国号と関係のある内容を述べた同類の記載も、珍しいことではありません。特に『新唐書』の「倭の名を惡んで、改めて日本と号す」という記載は、『旧唐書』の「倭国は自ら其の名の雅ならざるを惡み、改めて日本と為す」記載の復刻であろうと思います。こう見るならば、「日本」国号は、中国で出現した年代が少なくとも唐高宗の咸亨元年（六七〇）であるはずでしょう。これが今までに中国の文献で探された一番古い実例です。

まれではあるが唯一でないのは、古代の高麗の僧侶道顛がすでに『日本世紀』という書物を著しています。『日本書紀』天智天皇八年十月辛酉条の記載を見ますと、道顛が『日本世紀』を書き上げたのは天智天皇八年（六六九）より後であることがわかります。このことは、すでに述べたように天智天皇八年に「日本」に国号をあらためたという事実と符合します。中国社会科学院考古研究所の王仲殊教授の研究によれば、『日本書紀』は養老四年（七二〇）に完成したとはいえ、天武十年（六八一）にすでに、川島皇子・

忍壁皇子ら十二人が命を奉じて『帝紀』を作成し、『書紀』編纂の礎を築いています。道頭の著作は、天武朝（六七二〜六七六）の末年にまず『帝紀』に採録され、つづいて『日本書紀』の中に組みこまれたのではないでしょうか。要するに『日本世紀』という書名は、天智天皇八年（六六九）に国号を「日本」にあらためたという仮説を支持しているように思われます。この点においては、私も王仲殊教授の見方とまったく同じであります。さらに言えば、「日本」国号をもつ『日本世紀』という書物が六六九年に書き終わっていけば、『新唐書』と『旧唐書』のいわゆる六七〇年に国号を「日本」にあらためたということと非常に近いだろうと思います。

しかしながら、「日本」国号は『日本書紀』をさがす限り出現した一番古い年代は、大宝元年（七〇一）です。例えば、日本の文武天皇の大宝元年に頒布された『大宝令』公式令の中には、「明神御宇日本天皇詔旨云々」という詔書の書式が定められています。なお、大宝二年（七〇二）に入唐した僧弁正の『在唐憶本郷』の詩の第一句に、国号「日本」という二字が出現しています。すなわち「日辺に日本を瞻て、雲裏に雲端を望む。遠游して遠国を勞い、長安に苦しむを長く恨む」（日辺瞻日本、雲裏望雲端。遠游勞遠国、長恨苦長安）と述べます。この詩は、弁正が故郷の「日本」への長く続く思念の情を表現しました。彼は最後まで帰国せずに長安で亡くなり「唐土」に身を埋めました。この

情況は井真成の「形は既に異土に埋もれ、魂に故郷に帰らんことを庶(こいねが)う」(形既埋于異土、魂庶歸于故郷)の情況とまったく同じです。それ以外、『続日本紀』の記載によりますと、(文武天皇慶雲元年、七〇四年)秋七月甲申朔、正四位下の粟田朝臣真人がはじめて中国の楚州塩城(今の江蘇省塩城県)にいたった時、彼に對して、どこから来た使者であるのかと尋ねた人がいました。真人は「日本国使」と答えたのです。

その時が、唐人による「日本国使」という名称とのはじめての直接的な接触だったと言えます。これより以前の遣唐使の派遣時期はそれぞれ六六五年(第六次)と六六九年(第七次)であります。この情況はちょうど「咸亨元年(六七〇)、使を遣りて高麗を平らぐを賀せしむ。後に稍や夏音に習み、倭の名を悪んで、更めて日本と号す」と符合しています。この情況は、当然なことです。だからこそ、「日本」の国号の出現年代は唐高宗の咸亨元年として問題がないと思います。しかし、『日本書紀』の七〇一年は『新唐書』と『旧唐書』の六七〇年と比べるならば、三〇年近く遅れてしまいました。したがって、「日本」国号が日本で正式に確立した年代は、これよりさらに古いと思います。

そのほかに、唐の張守節が作った注釈書の『史記正義』の中にいわゆる「武后改倭国為日本国」という記載もあります。『史記正義』の案に「……武后、倭国を改めて日本国と為す。……又た倭国は、武皇后、改めて日本国と曰い、百濟の南に在り、海を隔て

島に依りて居る。凡そ百余小国なり」とあります。『史記正義』の序文によれば、その成書年代は唐玄宗の開元二十四年（七三六）のことではありますが。今回、収集した井真成墓誌に見える「日本」という国号は、その年代が唐玄宗の開元二十二年（七三四）であり、唐の張守節の『史記正義』の成書年代より二年ほど古いのです。だから、井真成墓誌の発現は「武后、倭国を改めて日本国と為す」の真実を欠く歴史記載を正すと言えるだろうと考えています。

ここで強調しておきたいのは、井真成墓誌に見える「日本」という国号が中国西安で初めて発見された唯一かつ最古の、長安で客死した「遣唐使」の成員の一人である入唐の留学生に関する墓誌の実物資料となりました。上述の通り、当該墓誌の絶対年代は開元二十二年、今からほぼ一二七〇年前であります。この時期は、日本の奈良時代（七一〇～七九四）であると同時に、中日両国の全面的、頻繁な文化交流の時期でもあります。この期間に、「遣唐使」は、言うまでもなく大きな作用を發揮したと言えます。なお、「遣唐使」に関する墓誌は、中国西安で発見された井真成墓誌以外に、中国洛陽で井真成墓誌より二一年早く日本使節の墓誌が発見されたこともあります。

以下の記事は朝日新聞社の渡辺延志記者の紹介です。

中国・西安で発見された遣唐使「井真成」墓誌に刻まれていた「日本」は最古のものとしていたが、「もつと古いものがあるようだ」との意見が出てきた。専修大が（二〇〇五年）一月二八、二九の両日に開催した研究検討会で、東洋大の高橋継男教授（中国史）が台湾の研究者の論文を紹介した。現物を見た人はいないが、「信用性は高そうだ」との見解が強い。多様な分野の専門家が集った場ならではの驚きだった。高橋教授が示したのは一九九八年に台湾の学術雑誌に掲載された台湾大学教授の論文である（筆者注・唐の先天二年（七一三）の『徐州刺史杜嗣先墓誌』には、「皇明遠被、日本來庭」という記録がある）。つまり、台湾の古美術店で一九九二年に見た唐の官僚の墓誌に、「唐の朝廷で宰相と一緒に日本からの使節に会った」と記されているという。この官僚は七一三年に死亡し、洛陽に葬られたと刻まれていたという。七三四年に死亡した井真成の墓誌より二一年早いことになる。高橋教授は「井真成墓誌が発見され『最古の日本』と話題になったので気づいた」という。

白村江の戦（六六三年）の後は長らく遣唐使は途絶えていたので、この官僚が会ったとなると、七〇二年に日本を出発した大宝の遣唐使のほかは見あたらぬ。国号を日本と名乗ることは前年の七〇一年に制定された大宝律令で定められたばかり。「国」といった場合、当時は播磨や常陸といった地域概念を示した。日本という概念

は外交の場でだけ必要だったはずだ」と鈴木靖民国学院大教授は指摘する。日本という国号を初めて背負って外交の舞台に登場した遣唐使が記録されていたこととなる。中国から参加した研究者は、台湾という想定しなかった場所にあせんとした表情だった。

論文を書いた台湾大教授は碑文研究では定評があるというが、この墓誌を店先で書き写したと記しており、発表した雑誌には写真も拓本も載っていない。墓誌は高値で売買されるので、偽造はさほど珍しくないという。研究会では「まず拓本を手しなくては」との声があがり、高橋教授ら東洋大のグループが研究に乗り出すことを表明した。(『朝日新聞』二〇〇五年二月八日夕刊)

とにかく、「遣唐使」に関する墓誌を多く発見し、発掘すればするほど謎の深まる井真成の実像がはつきり見えるようになります。一言で言えば、徐州刺史杜嗣先墓誌と井真成墓誌が前後して発見されたのは、言うまでもなく一二七〇年あまり前の日中両国の文化交流の歴史的証拠であって、その重要性和學術的価値は言葉には言い表わせないほどであります。私の研究によりますと、「日本」国号の出現の年代は唐高宗の咸亨元年(六七〇)として問題がないと思います。しかし、七〇一年に制定された大宝律令で出現し

た「日本」国号は、『新唐書』と『旧唐書』の記載でいう六七〇年と比べるならば、三〇年近く遅れてしまいました。したがって、「日本」国号が日本で正式に確立した年代は、これよりさらに古いはずだろうと思います。また、「国号日本」の書き方については、氣賀澤保規先生が次のように述べています。すなわち、「墓誌での本貫の書き方は、本貫にあたる地名を入れて『○○人』とし、外国人（非漢人）でも『康国人』などと国名をいれて表記する。『国号日本』という書き方は、墓誌においては管見のかぎりでははじめての事例である」と言います。私の見たところでは、これは天宝三載（七四四）の「故九姓突厥契苾李中郎墓誌」の「九姓突厥」の書き方と非常に近いであろうと思います。しかし、将来、「国号日本」をもつ遣唐使墓誌が一つでも出土すれば、この問題は、議論の余地はなく、歴史的な事実になるだろうと考えています。今から、その新しい考古学発見を楽しみにしております。

ご清聴ありがとうございます。

主な参考資料

- (1) 氣賀澤保規「残された空白個所の謎」『朝日新聞』二〇〇四年十月二十日。
- (2) a 氣賀澤保規編『唐代墓誌所在総合目録』（明治大学東洋史資料叢刊1）、汲古書院、一九

九七年。

b 明治大学大学院東洋史研究室ゼミ（氣賀澤ゼミ）編『西安碑林全集』所載「唐代墓誌目録」。

(3) a 石見清裕「唐代長安の外国人——国子監と留学生——」『東アジアの古代文化』一二三三号、大和書房、二〇〇五年。

b 石見清裕「入唐日本人「井真成墓誌」の性格をめぐる」『アジア遊学』七〇号、勉誠出版、二〇〇四年十二月。

(4) 石見清裕撰、王維坤・楊潔訳「關於入唐日本人井真成墓誌の性質——從中国唐代史的角度來看」黄留珠・魏全瑞主編『周秦漢唐文化研究』第四輯、三秦出版社、二〇〇六年。

(5) 中国社会科学院考古研究所編著『唐長安城郊隋唐墓』六二頁、文物出版社、一九八〇年。

(6) 中国科学院考古研究所編著『西安郊区隋唐墓』一〇〇頁と一〇三頁、科学出版社、一九六六年。

(7) 王維坤「唐日本留学生井真成与「贈尚衣奉御」的性質」『中国文物報』二〇〇七年二月二日、第七版。

(8) 「唐」李隆基撰・李林甫注・広池千九郎校注・内田智雄補訂『大唐六典』二三五—二三六頁、三秦出版社、一九九一年。

(9) 「宋」司馬光編著「元」胡三省音注『資治通鑑』六七—一五頁、中華書局、一九七六年。

- (10) 黑板勝美・国史大系編修会編『新訂増補国史大系・2・続日本紀』卷三三、四二三頁、吉川弘文館、一九六六年。

(11) 三省堂編修所『コンサイス人名辞典—日本編』三省堂、一九八三年。

(12) 鈴木靖民「皇帝は悼み国費で葬った」『毎日新聞』二〇〇四年十月十一日。

(13) 東野治之「胸躍る文字通りの大発見」『山陽新聞』二〇〇四年十月二十日。

(14) 汪向榮 夏応元編『中日関係史資料彙編』五四—五五頁、中華書局、一九八四年。

(15) 「后晋」劉昫等撰『旧唐書』五三四—一頁、中華書局、一九八六年。

(16) a 賈表明「新発現的唐日本人井真成墓誌及初歩研究」『西北大学学报』二〇〇四年六期。

b 専修大学・西北大学共同研究プロジェクト『井真成墓誌検討会資料』三〇頁、専修大学・朝日新聞社、二〇〇五年。

(17) 王建新「西北大学博物館収蔵唐代日本留学生墓誌考釈」『西北大学学报』二〇〇四年六期。

(18) 王維坤「唐日本留学生井真成改名新証」『中国文物報』二〇〇六年九月十五日第七版。

(19) 張雲方「読み解く「井真成」の謎」『人民中国』二〇〇五年五月号。

(20) 『古賀事務局長の洛中洛外日記』第1話「井真成異見」より 二〇〇五年六月十一日。

(21) 西垣祐作「書評「和姓に井真成を奪回せよ」(越境の会編、同時代社、二〇〇五年七月)」。

(22) 賈表明・葛継勇「井真成墓誌銘釈読再探」『西北大学学报』二〇〇五年二期。

(23) 陝西省考古研究所編著『西安北周安伽墓』一頁、文物出版社、二〇〇三年。

- (24) 西安市文物保護考古所編『前進中的西安市文物保護考古所——慶祝西安市文物保護考古所建所十周年（一九九四～二〇〇四）』四〇—四二頁、二〇〇四年。
- (25) 「唐」魏徵等撰『隋書』一八二七頁、中華書局、一九八七年。
- (26) 王友懷主編・李慧・曹發展注考『陝西金石文獻彙集・咸陽碑刻』上・下冊、三秦出版社、二〇〇三年。
- (27) 中國文物研究所・陝西省古籍整理辦公室編『新中國出土墓誌・陝西・壹』上冊、九三頁、文物出版社、二〇〇〇年。
- (28) 康蘭英編『陝西金石文獻彙集・榆林碑石』三秦出版社、二〇〇三年。
- (29) 吳鋼主編・趙力光編『陝西金石文獻彙集・鴛鴦七誌齋藏石』三秦出版社、一九九五年。
- (30) 王維坤「在唐の日本留学生井真成墓誌の発見と新研究」第一回王共同研究会、二〇〇七年五月十九日、國際日本文化研究センターで開催した。
- (31) 榮新江「從『井真成墓誌』看唐朝對日本遣唐使的禮遇」『西北大學學報』二〇〇五年四期。
- (32) 吳玉貴「井真成來華時間的一點意見」黃留珠・魏全瑞編『周秦漢唐文化研究』第四輯、二〇〇六年。
- (33) 西安市地方志館・張永祿主編『唐代長安詞典』四六六頁、陝西人民出版社、一九〇〇年。

発表を終えて

時間の経つのは本当に早いものです。私が国際日本文化研究センター外国人研究員、かつ日文研における共同研究会「古代東アジア交流の総合的研究」の研究代表者として招聘され、受入れ教授宇野隆夫先生をはじめとする日本国内35名の教授・研究員と共同研究を始めたのが2007年4月1日からで、信じられないことにすぐ1年が経過してしまいました。その間、5回にわたって色々な分野から共同研究会を開催いたしました。王共同研究会の趣旨は、簡単に言えば「古代東アジアでは、地域間交流が特に盛んであった。中でも中日の往来は、日本の国家制度・都市建設・宗教活動・交易活動にまで大きな変革をもたらすものであった。また中国も、その周辺の諸国やシルクロードを通じた西方諸国との交流により、その社会を充実・発展させていった。このように古代東アジアは、国際交流が大きな社会変革を生んだモデルケースであり、そのさらなる解明は、時間空間をこえて人類史を考えるための重要な知見となるであろう。そしてこのような学問的課題は一つの研究方法で解明することは難しく、学際的な共同研究が特に有用であると考えられる」というものです。

日文研における1年間の研究生活は、長いとも短いとも言えませんが、私にはこれまで「学問の道には終点がない」という体験がいっぱいあります。そして私に「戸枢不蠹、流水不腐」という道理を分からせました。いわゆる「戸枢不蠹」の「枢」は虫に食われないという意味であり、「流水不腐」の「腐」は、いつも動いているものは腐食しないという意味です。ここで私が想起するものは「流れる水」を象徴し、水がそなえる「潤い」と「命の源」の意味をもつ日文研の「シンボルマーク」であります。実際、文化交流の研究は流れる水と同じように、人と人との交流、心と心との交流、学問と学問との交流であるに違いないと思います。これらの交流と共同研究を通して、様々なことをよく勉強できました。この1年間に、私は共同研究会での4回の発表と「第208回日文研フォーラム」での発表のほか、2008年3月7日に日文研講堂で第33回国際研究集会「王権と都市」において「中国の都城のプランからみる日本の都城制の源流」というテーマで講演させていただきました。いま過去1年間の研究生活と研究成果を顧みて感慨深いものがあります。

私にとって、少なからぬ研究成果と業績が得られたのは、宇野先生をはじめとする共同研究会の皆様と日文研のご支援があったからにほかならないと感じています。末筆ながら、心より皆様にお礼を申し上げます。



日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
⑩①	9.11.11 (1997)	<p>KIM Uchang 金 禹昌 (高麗大学校文科大学教授・日文研客員教授)</p> <p>リヴィア・モネ Livia MONNET (モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員)</p> <p>カール・モスク Carl MOSK (ヴィクトリア大学教授・日文研客員教授)</p> <p>ヤン・シニコラ Jan SYKORA (カレル大学助教授・日文研客員助教授)</p> <p>キンヤ TSURUTA 鶴田 欣也 (プリティッシュコロンビア大学教授・日文研客員教授)</p> <p>パネルディスカッション 「日本および日本人—外からのまなざし」</p>
⑩②	9.12. 9	<p>ジョナ・サルズ Jonah SALZ (龍谷大学助教授)</p> <p>「猿から尼まで—狂言役者の修業」</p>
103	10. 1.13 (1998)	<p>KANG Shin-pyo 姜 信杓 (仁済大学校人文社会科学研究所教授・日文研客員教授)</p> <p>「京都考見録：韓国文化人類学者の経験」</p>
⑩④	10. 2.10	<p>GAO Wenhan 高 文漢 (山東大学教授・日文研客員教授)</p> <p>「中世禅林の異端者—一休宗純とその文学」</p>
105	10. 3. 3	<p>シュテファン・カイザー Stefan KAISER (筑波大学教授)</p> <p>「和魂漢才、和魂洋才—語彙・表記に見る日本文化の特性」</p>
106	10. 4. 7	<p>スミエ A. ジョーンズ Sumie A. JONES (インディアナ大学教授・日文研客員教授)</p> <p>「幽霊と妖怪の江戸文学」</p>
107	10. 5.19	<p>リヴィア・モネ Livia MONNET (モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員)</p> <p>「映画と文学の間に—金井美恵子の小説における映画的身体」</p>
⑩⑧	10. 6. 9	<p>SHIMAZAKI Hiroshi 島崎 博 (レスブリッジ大学教授・日文研客員教授)</p> <p>「化粧の文化地理」</p>

⑩	10. 7.14 (1998)	Peipei QIU 丘 培培 (バツサー大学助教授・日文研来訪研究員) 「なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか —詩的イメージとしての典故—」
110	10. 9. 8	ブルーノ・リーネル Bruno RHYNER (チューリッヒ大学講師・ユング派精神分析家・日文研客員助教授) 「日本の教育がかかえる問題点」
⑪	10.10. 6	アハマド・ムハマド・ファトヒ・モスタファ Ahmed M. F. MOSTAFA (カイロ大学講師・日文研客員助教授) 「『愛玩』—安岡章太郎の『戦後』のはじまり」
⑫	10.11.10	アリソン・トキタ Alison McQUEEN-TOKITA (モナシユ大学助教授・日文研客員助教授) 「『道行き』と日本文化—芸能を中心に」
113	10.12. 8	グレン・フック Glenn HOOK (シェフィールド大学教授・東京大学客員教授) 「地域主義の台頭と東アジアにおける日本の役割」
⑬	11. 1.12 (1999)	Du Qin 杜 勤 (華東師範大学助教授・華東師範大学外国語学院 第2学部副学部長・日文研客員助教授) 「『中』のシンボリズムについて—宇宙論からのアプローチ」
115	11. 2. 9	シェラ・スミス Sheila SMITH (ボストン大学助教授・日文研客員助教授) 「日本の民主主義—沖縄からの挑戦」
⑭	11. 3.16	エドウィン A. クランストン Edwin A. CRANSTON (ハーバード大学教授・日文研客員教授) 「うたの色々：翻訳は詩歌の詩化または死化？」
⑮	11. 4.13	ウィリアム J. タイラー William J. TYLER (オハイオ州立大学助教授・日文研客員助教授) 「石川淳著『黄金傳説』その他の翻訳について」
⑯	11. 5.11	KIM Ji Kyun 金 知見 (韓国・仏教教育大学大学院長・日文研客員教授) 「内藤湖南先生の眞蹟—高麗太祖顯陵詩」

119	11. 6. 8 (1999)	マ リ ア・ヴォイヴォディッチ Marija VOJVODIC (モンテネグロ共和国政府民営化推進部外資担当課長・ 日文研客員助教授) 「言葉いろいろ—日本の言葉に反映された文化の特徴」
⑫②①	11. 7.13	R E E C E Sachiko Taki リース・幸子 滝 (米国・ケドレン精神衛生センター箱庭療法トレーニングコン サルタント・日文研客員助教授) 「心理臨床の場に映った私生活の中の暴力と社会の中の暴力」
⑫②①	11. 9. 7	SONG Min 宋 敏 (韓国・国民大学校文化大学学長・日文研客員教授) 「明治初期における朝鮮修信使の日本見聞」
⑫②②	11.10.12	ジャン・ノエル・A. ロベール Jean-Noël A. ROBERT (フランス・パリ国立高等研究院教授・日文研客員教授) 「二十一世紀の漢文—死語の将来—」
⑫②③	11.11.16	ヴラディスラフ・ニカノロヴィッチ・ゴレグリアード Vladislav Nikanorovich GOREGLIAD (ロシア科学アカデミー東洋学研究所サクトペテルブルク 支部極東部長・日文研客員教授) 「鎖国時代のロシアにおける日本水夫たち」
⑫②④	11.12.14	X. Jie YANG 楊 曉捷 (カルガリー大学準教授・日文研客員助教授) 「鬼のいる光景—絵巻『長谷雄草紙』を読む—」
⑫②⑤	12. 1.11 (2000)	エミリア・ガ デ レ フ Emilia GADELEVA (日文研中核的研究機関研究員) 「年末・年始の聖なる夜 —西欧と日本の年末・年始の行事の比較的研究」
⑫②⑥	12. 2. 8	LEE Eung Soo 李 応寿 (世宗大学校副教授・日文研客員助教授) 「東アジア獅子舞の系譜—五色獅子を中心に—」
127	12. 3.14	アンナ・マリア・ト レ ー ン ハ ル ト Anna Maria THRÄNHARDT (デュッセルドルフ大学教授・日文研客員教授) 「皇室と日本赤十字社の始まり」
⑫②⑧	12. 4.11	ペッカ・コルホネン Pekka KORHONEN (ユフスクラ大学教授・日文研客員助教授) 「アジアの西の境」

⑫②	12. 5. 9 (2000)	KIM Jeong Rye 金 貞禮 (国立全南大学校副教授・日文研客員助教授) 「五・七・五、日本と韓国」
⑬①	12. 6. 13	ケネス L. リチャード Kenneth L. RICHARD (県立長崎シーボルト大学教授・日文研客員教授) 「出島—長崎—日本—世界 憧憬の旅 サダキチ・ハルトマン (1867—1944) と倉場富三郎 (1871—1945)」
131	12. 7. 11	リュドミラ・ホロドヴィッチ Lyudmila HOLODOVICH (ソフィア大学助教授・日文研客員助教授) 「お盆と正教の五旬祭—比較的なアプローチ—」
⑬②	12. 9. 12	マーク・メリ Mark MELI (日文研外来研究員) 「『物のあはれ』とは何なのか」
133	12.10.10	リチャード・ルビンジャー Richard RUBINGER (インディアナ大学教授・日文研客員教授) 「読み書きできなかつたのは誰か—明治の日本」
⑬④	12.11.14	SHIN Yong-tae 辛 容泰 (東国大学校日本学研究所研究員・日文研客員教授) 「日本語の『カゲ(光・蔭)』外—日本文化のルーツを探る—」
135	12.12.12	CAI Dun da 蔡 敦達 (同済大学日本学研究所助教授・日文研客員助教授) 「中国文人が観た明治日本—旅行記を読む—」
⑬⑥	13. 2. 6 (2001)	バルト・ガーンズ Bart GAENS (日文研中核的研究機関研究員) 「長者の山—近世的経営の日欧比較—」
137	13. 3. 6	ポール・S. グローナー Paul S. GRONER (ヴァージニア大学教授・日文研客員教授) 「仏教の戒律とは何か?」
⑬⑧	13. 4. 10	LI Zhuo 李 卓 (南開大学教授・日文研客員教授) 「中日姓名の比較について—親族の血縁性と社会性—」
⑬⑨	13. 5. 8	エッケハルト・マイ Ekkehard MAY (フランクフルト大学教授・日文研客員教授) 「西洋における俳句の新しい受容へ」

⑭④	13. 6.12 (2001)	XU Subin 徐 蘇斌 (日文研外国人研究員) 「中国現代建築の成立基盤—留日建築家・趙冬日と人民大会堂—」
141	13. 7.10	ヘンリー D. スミス Henry D. SMITH, II (コロンビア大学教授 日文研外国人研究員) 「忠臣蔵再考—四十七士の三百年—」
⑭⑤	13. 9.18	ジョナサン M. オーガスティン Jonathan M. AUGUSTINE (日文研外来研究員) 「聖人伝、高僧伝と社会事業—古代日本、ヨーロッパの高僧を中心に—」
143	13.10. 9	アレクサンダー・ボビン Alexander VOVIN (ハワイ大学準教授・日文研客員助教授) 「日韓上代言語域：神と国と人と」
144	13.11.13	GUAN Wen Na 官 文娜 (日文研外国人研究員) 「日本社会における『近親婚』と中国の『同姓不婚』との比較」
145	13.12.11	チグサ キム ラステイーブン Chigusa KIMURA-STEVEN (ニュージーランド・カンタベリー大学準教授・日文研外国人研究員) 「大庭みな子『三匹の蟹』：ミニスカート文化の中の女と男」
⑭⑥	14. 1.15 (2002)	SHIN Chang Ho 申 昌浩 (日文研中核的研究機関研究員) 「親日仏教と韓国社会」
⑭⑦	14. 2.12	マシミリアーノ ト マシ Massimiliano TOMASI (ウェスタン ワシントン大学準教授・日文研外国人研究員) 「近代詩における擬声語について」
148	14. 3.12	JEONG Hye Kyeong 鄭 惠卿 (世宗大学校人文科学大学副教授・日文研外国人研究員) 「日韓言語文化の比較—語る文化と語らぬ文化—」
149	14. 4. 9	マッシュュー フィリップ マッケルウェイ Matthew Philip McKELWAY (ニューヨーク大学助教授・日文研外国人研究員) 「初期洛中洛外図の人脈と武家作法—三条本を中心に—」

⑮	14. 5.14 (2002)	LEE Kwang Joon 李 光濬 (東西心理学研究所所長・日文研外国人研究員) 「禅心理学的生命観」
⑮	14. 6.11	LU Yi 魯 義 (中国・北京外国問題研究会教授・日文研外国人研究員) 「中日関係と相互理解」
152	14. 7. 9	アレクシア ボロ Alexia BORO (イタリア カ・フォスカリ大学助手・日文研外国人研究員) 「建物と権力—明治初期の東京の建築について」
⑮	14. 9.10	YEE Milim 李 美林 (日文研外国人研究員) 「近世後期『美人風俗図』の絵画的特徴—日韓比較—」
154	14.10. 8	マルクス リュッターマン Markus RÜTTERMAN (日文研外国人研究員) 「伝授から伝統へ—中・近世日本における『啓蒙』の一面について」
⑮	14.11. 5	KIM Moon Gil 金 文吉 (韓国・釜山外国語大学校教授・日文研外国人研究員) 「神代文字と日本キリスト教—国学運動と国字改良」
156	14.12.10	スーザン L. バーンズ Susan L. BURNS (米・シカゴ大学準教授・日文研外国人研究員) 「問題化された身体—明治時代における医学と文化」
157	15. 1.14 (2003)	デビッド L. ハウエル David L. HOWELL (米・プリンストン大学準教授・日文研外国人研究員) 「天保七年常州那珂湊敵討ち一件顛末」
158	15. 2.18	Zhan Xiaomei 戦 曉梅 (日文研研究機関研究員) 「隠逸山水に秘められた『近代』—富岡鉄斎を読む—」
159	15. 3.11	リチャード H. オカダ Richard H. OKADA (米・プリンストン大学準教授・日文研外国人研究員) 「『母国語』とは誰の言葉? : 言語と国民国家」

⑩	15. 4. 8 (2003)	ビル ス ウェル Bill SEWELL (カナダ・セントメアリー大学助教授・日文研外国人研究員) 「旧満州における戦前日本の町づくり活動」
161	15. 5.20	PARK JeonYull 朴 鎰烈 (韓国中央大学校教授・日文研外国人研究員) 「神々の使者に扮装する愉しみ—門付け儀礼の演劇性をめぐって—」
162	15. 6.10	HEEM YongTack 林 容澤 (韓国・仁荷大学校副教授・日文研外国人研究員) 「詩の翻訳は可能か—金素雲訳『朝鮮詩集』の場合—」
163	15. 7. 8	ボイカ エリト ツイゴバ Boyka Elit TSIGOVA (ブルガリア・ソフィア大学準教授・日文研外国人研究員) 「ブルガリア人の日本文化観—その理解と日本文芸作品の翻訳をめぐって—」
164	15. 9. 9	インゲ マリア ダニエルズ Inge Maria DANIELS (ロイヤル・カレッジ・オブ・アート客員講師・日文研外来研究員) 「現代住宅に見られる日本人と『モノ』の関わり方」
⑩	15.10.14	WANG Cheng 王 成 (首都師範大学助教授・日文研外国人研究員) 「阿部知二が描いた“北京”」
⑩	15.11.11	CHEN Hui 陳 暉 (中国社会科学院亜太日本研究所研究員教授・日文研外国人研究員) 「明治教育家 成瀬仁蔵のアジアへの影響—家族改革をめぐって—」
167	15.12. 9	エフゲニー S. バクシエーフ Evgeny S. BAKSHEEV (国立ロシア文化研究所研究員・日文研外国人研究員) 「人と神とが出会う場所 沖縄県宮古諸島の聖地・拝所—その構造と形態を中心として—」
168	16. 4.13 (2004)	MIN Joosik 閔 周植 (韓国・嶺南大学校教授・日文研外国人研究員) 「風流の東アジア—美を生きる技法—」
⑩	16. 5.11	コンスタンティン ノミコス ヴァポリス Constantine Nomikos VAPORIS (米国・メリーランド大学準教授・日文研外国人研究員) 「参勤交代と日本の文化」

⑩	16. 6. 8 (2004)	WANG Shukun 王 述坤 (中国・東南大学教授・日文研外国人研究員) 「近代における日本、中国の文人・作家の自殺」
⑪	16. 7.13	Victor Victorovich RYBIN ヴィクトー ヴィクトロヴィッチ リビン (ロシア・サンクトペテルブルグ大学助教授・日文研外国人研究員) 「知られざる歌麿—『百千鳥狂歌合はせ』の詩的、文法的分析」
172	16. 9.14	Scott NORTH スコット ノース (大阪大学大学院人間科学研究科助教授) 「セールスマンの死 : サービス残業・湾岸戦争・過労死」
173	16.10.19	SE Yin 色 音 (中国社会科学院民族研究所研究員 教授・日文研外国人研究員) 「シャーマニズムから見た〈日本的なるもの〉」
174	16.11. 9	LEE HanSop 李 漢燮 (韓国 高麗大学校日語日文学科教授・日文研外国人研究員) 「明治期の外国人留学生と文明開化」
175	16.12.14	Alexander Marshall VESEY アレクサンダー マーシャル ヴィーシー (米国 ストーンヒル大学助教授・日文研外国人研究員) 「近世村社会における仏教僧侶の村人との仲介役的役割」
176	17. 1.11 (2005)	Roy Anthony STARRS ロイ アンソニー スタース (ニュージーランド オタゴ大学シニア・レクチャラー・日文研外国人研究員) 「国家主義者としての三島由紀夫—戦後の原点」
⑫	17. 2. 8	Mats Arne KARLSSON マッツ アーネ カールソン (ストックホルム大学助教授・日文研外国人研究員) 「僕はこの暗合を無気味に思ひ... 芥川龍之介『歯車』、ストリンダベリー、そして狂気」
⑬	17. 3. 8	WU Yongmei 呉 咏梅 (北京日本学術研究センター専任講師・日文研外国人研究員) 「アジアにおけるメディア文化の交通—中国人大学生が見た日本のテレビドラマをめぐって—」
⑭	17. 4.12	Noel John PINNINGTON ノエル ジョン ピニングトン (アリゾナ大学助教授・日文研外国人研究員) 「中世能楽論における『道』の概念—能役者が歩むべき『道』」

180	17. 5.10 (2005)	CHI Myong Kwan 池 明観 (日文研外国人研究員) 「韓国現代史と日本について—1973年から1988年まで—」
181	17. 6.14	イアン ジェームズ マク マレン Ian James MCMULLEN (オックスフォード大学ペンブロークカレッジ教授・日文研外国人研究員) 「徳川時代の孔子祭」
182	17. 7.12	CHUNG Jae Jeong 鄭 在貞 (ソウル市立大学校教授・日文研外国人研究員) 「韓日につきまとう歴史の影とその克服のための試み」
183	17. 9.20	オギュスタン ベル ク Augustin BERQUE (フランス国立社会科学高等研究院教授・日文研外国人研究員) 「日本の住まいにおける風土性と持続性」
184	17.10.11	NO Sung Hwan 魯 成煥 (蔚山大学校人文大学日本語日本学科教授・日文研究外来研究員) 「韓国から見た日本のお盆」
185	17.11.16	セルゲイ ラブチエフ Sergey LAPTEV (マクシム・ゴリキー文学学院助教授・日文研外国人研究員) 「考古学と文字—古代日本の漢字文化を中心に」
186	17.12.20	YUON Sang In 尹 相仁 (漢陽大学校国際文化大学日本語文化学科教授・日文研外国人研究員) 「〈日流〉の水脈—なぜ韓国の若者は日本の現代小説に惹かれるのか」
187	18. 1.10 (2006)	アンドリュウ ガーストル Andrew GERSTLE (ロンドン大学 SOAS 教授・日文研外国人研究員) 「女形の身体を描く—肉体表現と流光斎—」
188	18. 2.21	ウィリアム バック ブレッカー William Puck BRECHER (南カリフォルニア大学助手・日文研外来研究員) 「郊外の隠遁への憧れ—江戸時代の郊外における美学的スペース—」
189	18. 3.14	サ レ アーデル アミン SALEH Adel Amin (カイロ大学文学部日本語学科専任講師・日文研外国人研究員) 「『国語』という神話—日本とエジプトにおける言語の近代化をめぐる—」

190	18. 4.18 (2006)	KIM Yongui 金 容儀 (全南大学校人文学副教授・日文研外国人研究員) 「玄界灘を渡った鬼のイメージ-なぜ韓国のトケビは日本の鬼のイメージで語られるのか-」
191	18. 5.16	CHOI Park Kwang 崔 博光 (成均館大学校教授・日文研外国人研究員) 「京都と文化表象-18世紀朝鮮通信使の目から-」
192	18. 6.13	LIU Chun Ying 劉 春英 (東北師範大学助教授・日文研外国人研究員) 「『満州国』時代『新京』に於ける日本人作家」
193	18. 7.11	ZHOU Wei Hong 周 維宏 (北京日本学研究中心教授・日文研外国人研究員) 「近代化による農村の変貌とその捉え方について-中日農村を比較して-」
194	18. 9.19	ダリア シュバンパリーテ Dalia ŠVAMBARYTĖ (リトアニア ビリニユス大学講師・日文研外国人研究員) 「オセアニアの島々のイメージ形成をめぐる」
195	18.10.10	エドウィーナ パーマー Edwina PALMER (カンタベリー大学教授・日文研外国人研究員) 「ニュージーランドの学生が学ぶ「日本」-高等教育の社会科カリキュラムを中心に-
196	18.11.14	ヨセフ キブルツ Josef A. KYBURZ (フランス国立科学研究センター教授・日文研外国人研究員) 「お札が語る日本人の神仏信仰」
197	18.12.13	ロバート エスキルドセン Robert ESKILDSEN (日文研外国人研究員) 「異国船物語-江戸後期に描かれた船-」
198	19. 1.16 (2007)	ブラット アブラハム ジョージ Pullattu Abraham GEORGE (ジャワハルラル ネルー大学日本語学科準教授・日文研外国人研究員) 「日印関係とインドにおける日本研究-宮沢賢治の菜食主義の思想-」
199	19. 2.13	ステイリアノス パパアレクサンドロポロス Stylianos PAPALEXANDROPOULOS (アテネ大学神学部 準教授 日文研 外国人研究員) 「日本仏教論-その思想史的展開をめぐる-」

200	19. 3.13 (2007)	LU Liu Di 陸 留弟 (華東師範大学外国語学院日本語学部教授・日文研外国人研究員) 「楽しみの茶と嗜みの茶—中国から見た茶の湯文化—」
201	19. 4.18	モ ハ メ ッ ド レ ザ サ ル カ ー ル ア ラ ニ Mohammad Reza SARKAR ARANI (アラメ タバタバイ大学教育学部(イラン)助教授・日文研外国人研究員) 「国境を越えた日本の学校文化」
202	19. 5.16	ZHANG ZheJun 張 哲俊 (北京師範大学文学院比較文学研究所教授・日文研外国人研究員) 「唐代文学における日本のイメージ」
203	19. 6.13	チャワ-リン サウエ-ッタナン Chavalin SVETANANT (チュラーロンコーン大学専任講師・日文研外国人研究員) 「『気』の思想・『こころ』の文化—言語学からみた日本人とタイ人の心のあり方—」
204	19. 7.25	シンシア ネリ ザ ヤ ス Cynthia Neri ZAYAS (フィリピン国立大学国際研究センター準教授・日文研外国人研究員) 「淡路島における災害と記憶の文化—荒神信仰を中心に—」
205	19. 9.11	チャン ティ チュン トアン TRAN Thi Chung Toan (ベトナム国立ハノイ国家大学助教授・日文研外国人研究員) 「宮本常一の民俗誌を通して見た日本女性と日本文化理解」
206	19.10.10	ペイ ヒ ヨ ン イル PAI Hyung Il (カリフォルニア大学サンタバーバラ校準教授・日文研外国人研究員) 「朝鮮旅行案内書に見る日本人のロマン」
207	19.11.14	KIM YoungCheol 金 榮哲 (漢陽大学校日本語文化学部教授・日文研外国人研究員) 「遊興の『花』としての理想—妓生と遊女—」
208	19.12.12	WANG Weikun 王 維坤 (西北大学国際文化交流学院教授・副院長・日文研外国人研究員) 「中国出土の文物からみた中日古代文化交流史—和同開珎と井真成墓誌を中心として—」
209	20. 1.16 (2008)	ブライアン 小野坂 ルバ-ト Brian Onozaka RUPPERT (イリノイ大学東アジア学科・宗教学科准教授・日文研外国人研究員) 「懺悔・供養・修法—前近代日本仏教の心を探る—」

210	20. 2.26	<small>マイク モラスキー</small> Michael S. MOLASKY (ミネソタ大学准教授・日文研外国人研究員) 「関西のジャズ喫茶文化」
211	20. 3.18	<small>グニラ リンドバーグ ワダ</small> Gunilla LINDBERG-WADA (ストックホルム大学主任教授・日文研外国人研究員) 「北極から日本へ —スウェーデン探検隊が見た明治日本—」
212	20. 4.23	<small>ZHOU Jian</small> 周 見 (中国社会科学院世界経済政治研究所教授・日文研外国人研究員) 「洪沢栄一と張謇 —日中近代企業家に関する一つの比較—」

○は報告書既刊

なお、報告書の全文をホームページで見ることが出来ます。

発行日 2008年7月1日
編集発行 国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話 (075) 335-2048
ホームページ : <http://www.nichibun.ac.jp>

©2008 国際日本文化研究センター

■ 日時

2007年12月12日（水）

午後2時～4時

■ 会場

キャンパスプラザ京都

第三〇回 中国出土文物及び中国古文化流史 王維坤 国際日本文化研究会